

風吹こうとも

幸南食糧 創業史

- 昭和46年(1971) 川西修氏が大阪府松原市で川西米穀店を創業
- 51年(1976) 幸南食糧を設立し、精米工場を建設
- 57年(1982) 大和川の洪水により、精米工場が壊滅的打撃を受ける
- 58年(1983) 三宅工場(松原市)を新設
- 平成17年(2005) おくさま印低温物流センターを新設 貯蔵能力2000トンへ 品質管理分析センター開設
- 23年(2011) 川西孝彦氏が社長就任。修氏は会長に 関東営業部を開設し、東京進出
- 25年(2013) 香港へのコメ輸出を開始
- 26年(2014) 大阪市の超高層ビル「あべのハルカス」に、あべのハルカス営業部を開設
- 27年(2015) 福岡市に西日本営業部を立ち上げて九州進出。開空工場(大阪府和泉市)が始動
- 28年(2016) 食品開発センターを新設

商売志し 米問屋で修業



関西 経営者列伝

幸南食糧

川西 修 会長

第1章

かわにし・おさむ 昭和21年、香川県生まれ。高校卒業後に郷里を離れ、大阪市の米問屋で修業を積み、46年に大阪府松原市で7坪(約23平方m)の店舗を借りて「川西米穀店」を起業した。51年には「幸南食糧」を設立。社長として操業をふるい、平成23年に会長就任。現在も関連会社4社の代表取締役を務め、経営経験で得た「気づき」を広く伝える講演活動に取り組む。

食の多様化や欧米化などに伴い、日本人が消費するコメの量は減少傾向が続いている。そんな中、米穀関連の製造・卸の幸南食糧(大阪府松原市)は、消費者のニーズも時代の変化をいち早く読み取り、成長を感じてきた。「最大のライバルは競合他社ではなく、時代の流れ」と言い切る創業者の川西修会長(78)は、波瀾万丈な半生から得た教訓を胸に、さらなる飛躍への挑戦を続ける。

当社はコメを中心に、精米から加工・卸まで一貫して提供する食品会社です。全国の生産者や集荷団体から仕入れたコメを小分け包装し、「おくさま印」のブランドで小売店やスーパーなどに出荷しています。

近年は、お米のギフトや玄米、赤飯のバリエーションが増えてきた。加工品の製造・販売なども手掛けており、商品のバリエーションを増やしています。

チャレンジをしていない企業にはない、非常に厳しい状況ですが、世の中の需要や環境の変化に気づき、販売をすすめて「一番大事だと考えています」。

親に迷惑させる 単身で大阪へ

「昭和21年、香川県の山村で3人兄弟の次男として誕生。40年に飯田工業高校を卒業し、家計の助けになれ、と単身大阪に働き出した」



学生時代に両親の手伝いを通じて商売の業を覚えた

リレー講座 関西経営者列伝

第4回 森下 仁丹 駒村純一 社長

会場 産経新聞大阪本社 4階 (大阪府浪速区) 06-6333-9057
問い合わせ 平日午前10時~午後5時

9月13日(木) 午後2時~

努力なくして 開かぬ成功の扉

仕事をして子供人を育てていました。子供ながらに「将来は自分で何か商売をやってみよう」という思いをさせてあげたい、という思いがありました。だから高校を卒業する、仕事も決まらずに、すぐ大阪に出てきました。当然、寝る場所、行くところもない。フェリで大阪港に着いて近くで食事をしていたら、ふと目にしたのが新開の求人欄でした。

そこに載っていた大阪市内の米問屋の求人は住み込みで食事がついて、給料もいい。一度、修業してみよう。その足で面接に行き、採用されました。それがこの業界に身を置く最初の一歩でした。

ところが業務に仕事に就くと、正直、おもしろくない。就職してしまえば「おもしろくない」と思ってしまった。米問屋でやるのは、注文に応じて60〜90分の間に米袋を1日に何回、何千回もトラックに積み降ろししなければなりません。フォークリフトなどの機械も、体がこたえます。お米の重労働にも、日もたてて帰るという生活は、想像以上に大変でした。

「夢も希望もない」と思っていました。自分には自分で商売をして、両親に少しでもお返ししたい。お米の業を覚えたから、今後は自分で商売をする。お米の業を覚えたから、今後は自分で商売をする。

「お米の業を覚えたから、今後は自分で商売をする」という思いが、自分自身を動かす原動力になりました。成功への扉は自動扉ではなく、努力を以て扉を開くことではなりません。米問屋での修業が、今の自分を形づけてくれたと思っています。

次回は15日に掲載